

# アトピー性皮膚炎の検査 ~自分が本当に良くなっているのかどうか理解しながら治療しましょう~

検査は疾病の原因を特定し、対処法を見出す手がかりとなります。

ここではアトピー患者さんに行う検査にはどんなものがあり、その結果をどうとらえればよいのかを説明していきます。

## 抗体測定法：RAST,MAST,FAST I型アレルギーの検査

IgE抗体はI型アレルギー(即時型、アトピー型アレルギー)を起こす抗体です。RAST,MAST,FASTは、個々のアレルゲン(卵白、牛乳、ダニなど)に対する抗体を測定します。スコア2以上であれば一応陽性とされます。2以上あれば血液中にその食物に対するIgE抗体をもっていることはまちがいないのですが、それを食べたらアトピーがでるかかどうかは別の問題です。アトピー治療で有名な高雄病院では過去に入院患者さんを対象にきっちりと除去食をして、食物アレルギーの可能性を調査しました。その結果、成人はもちろん小学生以上のアトピー患者さんの場合、RASTスコアが2から3あっても、食物アレルギーによる症状はほとんど起こさないことがわかりました。赤ちゃんの場合は、10人に1人位の確率で食物アレルギーが関与しています。

## 総IgE測定：RISTなど I型アレルギーの検査

単位量の体液中に存在する免疫グロブリンとしてのIgEの総量が総IgEです。成人の正常値は250IU/ml以下くらいです。正常の場合、血清IgEレベルは5才で成人の2/3に達します。IgEレベルは、アトピー疾患(アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、気管支喘息)寄生虫感染などで増加します。

一般には、IgEが高値であればアトピー体質(I型アレルギーを起こしやすい物質)ということになります。しかし、成人アトピー性皮膚炎の患者さんの約2割は、IgEが正常でも発症しています。このデータは、アトピーは単純にI型アレルギーのみで発症しているのではないということの一つの根拠となっています。ですからIgEだけでアトピーを語ることはできません。

一方、当初880IU/mlと軽度高値だったIgEが、アトピーの全身的な悪化とともに、わずか三か月で7,100となり、半年後には13,500となり、今度はアトピーの改善とともに徐々に減っていき、1年後には5,400、2年後には2,600まで減った例もあります。こういう変化を示す例もときどきあります。

このように、IgEの数値は変動するものなので、一定の参考にはなりますが、この数字だけ見てがっかりしたり、喜んだりしなくてもいいということです。

## LDH 皮膚炎の広がりを示す

LDHの数値がいちばん参考になります。施設により正常値は若干異なりますが、平均して300~400IU/ml程度です。血清LDHはその時点での皮膚炎の広がりをよく示しています。

顔だけが赤くても上昇は軽度ですが、全身に皮膚炎があれば高値を示します。リバウンドで全身が赤くはれ上がって黄汁が出ているような時は、800,900~1,000以上にもなります。高雄病院では、リバウンドで1,700IU/mlを呈した人が最高値でした。

リバウンド状態でも、たとえばステロイド外用剤をぬって皮膚炎をコントロールすれば、ものの2,3日で1,000あったLDHが600~700程度、さらに数日で400~500程度にどんどん改善していきます。

## 好酸球 I型アレルギーの検査

施設により正常値が若干異なりますが、白血球分画で3~6%以下、絶対数で200個~500個/ $\mu$ lくらいです。皮膚炎の症状が強い時は、30~40%に及ぶ増加をみることもあります。しかし、LDHほどリアルタイムに皮膚炎の広がりを反映しているわけではありません。LDHより遅れたりずれたりします。

最終的にはアトピーが落ち着けば、しばらくして好酸球も落ち着くようです。したがって臨床的には、LDHのほうが役に立つ検査です。

## 白血球像

白血球の中でリンパ球が35%以上の時は免疫が保たれていますが、35%以下の時は免疫低下を疑います。

## 漢方薬を服用している方へ GOT,GPT, -GTP,BUN,Cr

漢方薬を服用している人は、LDH以外にGOT,GPT, -GTP,BUN,Crを測定する必要があります。この検査をすることで、薬害のスクリーニング検査ができ、血液中や組織中のビタミンの必要量を測定することができます。GOT,GPTの値がそれぞれ22くらいの時が、最もビタミンのバランスがとれているときです。